

「どこだ！」（海のご当地落語in川崎）

「どこにあるだね？ いったいどこにあるだね。

「ん、あなた、ちょっと、ダメですよ、そんな、服着て、ちょっと、「そこは海ですよ！ 飛び込んじゃった。

「どこにあるだね

「この海は遊泳禁止ですよ。

「どこにあるだね？

「泳いじゃだめだって

「どこだね

「捜し物してるね。財布か何か落としたかい？

「違うだよ

「アサリかい？ ここ、小さいアサリは取っちゃだめだからね。

「違うだよ。ノリだよ。

「え？ ノリ？ 言ってくれよ。うちにあるからあげよう。

「本当かね。

「こっちな。

「見ず知らずのオラにすまねえな

「ちよいと待ってな。確かこの棚に。あったあった。ほらよ。

「何だね？

「ノリだよ探してたんだろ？

「これ工作で使うノリでねえか。オラが探してるのは、の、の、

「ノートかい？

「違うだよ。の、の、

「ああ、ノーマル鉛筆

「なんだねそれは

「ハード、ソフト、ノーマルのノーマル鉛筆

「違うだよ食べる海苔だね。

「そんなのは無いよ。うちは文房具屋だからね。

「文房具屋？ それじゃないね。

「他あたってくれ

「わかっただよ。ここ入ってみるかね。ごめんくださいまし

「いらっしゃい。

「ここ、海苔かえるかね。

「え？ ここかい？ もう少し歩かないとだめだな。

「どこ行けば海苔変えるかね

「そうだな。武蔵小杉じゃねえか？

「海の近くでねえのか？

「海の近く？ じゃ川崎で京急かな

「海苔買えに来ただよ。

「川崎か武蔵小杉だな

「何の話してるかね

「電車の乗り換えだろ？

「そうじゃねえだよ。海苔買いに来たんだ。

「海苔？ 食べる海苔かい？ 何言ってんだい。うちは海苔屋だよ。

「合ってるでねえか。海苔ほしくて来ただよ。

「ここまで？ はるばる？ 変わった人だね。

「聞いて下せえ。実はご先祖様が幸豊様につかえてまして、

「ゆきぼよに使える？

「チケットツクの撮影スタッフじゃねえだ池上幸豊様でござえます。

「誰だい？

「知らねえのかね、賢くて偉い人だね。このあたりを埋め立てて、土地を作って近代化を進めて工場が沢山立って、川や海が汚れた張本人だね。

「偉くねえじゃねえか。最近じゃとても綺麗になって、多摩川周辺には数多くの生き物が生息してるんだよ。海の水がきれいじゃないと生きていけない海藻だって生息してるぐらいだからな。

「お前さん詳しいな。ご先祖様からは海苔の産地と聞いてきただよ。

「あんたいつの時代の話をしてるんだい？1972年に海苔の養殖は行われなくなって、川崎では海苔は作ってないんだよ。

「ひょっとして幸豊のせいかな？

「それは知らねえけど。うちは海苔問屋だ。そんなに欲しいなら何枚か分けてやろう。

「本当かね。

「今、みんな売れちまってる。しばらくしたら仕入れ人が戻って来るから待ってな。

「ありがとうございます。

「お茶でも飲んで待ってな。

「ありがとうございます。

しばらくして

「まだ帰らねえかね。

「まあ、お茶でも飲んで待ってな。

「まだ帰らねえかね。

「まあ、お茶でも飲んで待ってな。

「まだ帰らねえかね。

「まあ、お茶でも飲んで待ってな。

「お茶飲みねえだよ。腹カッポンカッポンになっただよ。

「お、帰ってきた。ご苦労さま。

「海苔、海苔が来たかね。

「あ、済まないねえ。

「どうしたかね？

「仕入れて帰る途中で浅草と品川によったら、全部売れちゃったって。

「何してるだね。

「話してなかったね。房総で仕入れた海苔をあちこちで売って戻ってくるから、こういう日もあるんだよ。

「こだな待ったのに、海苔が手に入らねえのか。

「ちょっと待ちな。あったあった。注文が取り消しになったのがあったんだよ。これ、お前さんに分けてあげよう。

「念願の海苔だね。黒黒として、この艶、磯の匂いもたまらねえなあ。

「生海苔も少し分けてあげよう。さっと炙ると美味しくなるから。

「炙りだね。

「喜んでもらえて嬉しいよ。

「焼いた海苔が8枚、生海苔が4枚。と言うことは焼いた海苔が2枚で生海苔が1枚だね。こっち分けといて

「何おかしなマネしてるんだよ。わけわからなくなっちゃうだろ。

「いいだよ。こっちは焼く分だ。